

注意..本編のネタバレを含みます。

舞台裏の攻防

ワタシはエラリー会長が苦手だ。

人のことかわいくないあだ名で呼んでくるし、油断も隙も無いし、ワタシに無い物全部持つていくくせして、欲があるようには見えないし、なのに大好きな先輩のことは横取りしようとしてくるし。

何故か謎の人物Xのことを知っていて、なのにワタシたちが動き出すまで全くそんな素振りを見せなかったし、そもそもどうして生徒会長なのに耳かき探偵部の部長代理をしているのかとか、先輩のことをどう思っているのかとか、先輩に渡したあの謎はどういうことなのかとか、あの人に関しては謎めいていることがあまりにも多すぎる。

何を考えているのが全く読めない。

だから苦手だ。

「会長、先輩から聞きました。一緒にお買い物に行ったんですって？　そこまでのこと、一体いつワタシがお願いしました？」

昼休み。

ワタシは生徒会室で一人作業中だった会長のところに乗り込み、単刀直入に問い詰めた。

「おや、これはかわいいお客さんだ……ふふつ、魅力的な人をデートに誘うことが、そんなにいけないことだったかい？」

「ええ、そうです。先輩はワタシの先輩なんですから、勝手に手を出さないでもらえます？」というか、やっぱりデートだったんじゃないですか。

後で先輩にもガツンと言っておかなくちゃ。

「まあまあ、落ち着いてくれ。確かにコゴローちゃんの気持ちを知らながら粗相を働いたことは謝ろう……ただ、私は何の手がかりも持たなかった彼のために、かなり手を尽くしたと思うんだけど……どうかな？」

「それは……確かにその通りです。でもそれとこれとは話が別です」

「ははっ、手厳しいね」

余裕ぶったセリフを口にして、につこりと微笑みを浮かべてくる。

そんな何かを見透かすような視線から逃れるように周りに目を遣ったところで、今更この状況の違和感にワタシは気づいた。

「……ほかの生徒会の人たちは？」

「今は昼休みだ。自分たちの教室や食堂で、お友達とお昼でも食べているんじゃないかな？」

「……会長は？」

「うん？」

「会長はこんなところで何やってるんですか？」

そう、違和感の正体。

他の学生が——生徒会役員ですら休み時間を謳歌しているのに、この人だけがこんなところで一体何をしているのか。

「何って……業務だけど？」

「やらなきゃいけないんですか？」

「まあ、そうだね」

「生徒会の人たちは手伝ってくれないんですか？」

「私が好きでやっていることさ」

「お昼は食べたんですか？」

「今日は時間が無かったね」

「いつもは食べれてるんですか？」

「半々、といったところかな」

「いつもそんな感じなんですか？」

「まあ、そうだね」

「寂しく……ないんですか？」

その質問を受けて、ふっと会長の優しい眼差しから光が失われたように見えた。

「……まあ、そうだね」

うろんな瞳がワタシを見つめる。

居心地の悪さに、思わず逃げ出したくなった。

「でも私はこの学園の生徒会長だ。学生のためなら、これくらい喜んで引き受けるよ」

「……そうですか」

見てはいけないものを見てしまった気になって、妙な危機感が湧いてくる。

まるで、親の不倫現場でも目撃してしまったかのような、そんな危機感が。

「それで……用件はそれだけかな？ 本当ならお茶でも用意してもてなすべきなのだろう

けれど……まあ、見ての通りちよっと手が離せなくてね。急用でないなら後日埋め合わせ

をするから、また今度でもいいかな？」

「……いえ、その必要はありません。ちよっと文句を言いにきただけですから」

本当はこの場に乗じて謎の人物Xについての情報を引き出そうと思っていたけど、会長

の言う通りここは一度引いて――

「あ、そうだ。ちよっとだけ待っていてくれるかな？」

「え？」

すると会長は五枚の紙を取り出し、迷いのない手つきでペンを走らせた。

「これを受け取ってくれ。私からの手土産さ」

受け取り、一目見るだけでそれが何かはすぐに分かった。

「これは……謎解き？」

「その通り。好きにアレンジしてくれて構わない。勝手に彼とキミの時間を奪ってしまったお詫びに、これを使って仲を深めてくれ」

その内容を見てワタシは驚いた。

解き直し系の設計で、しかも前提となる知識がここにいる二人。

この内容を、この一瞬で——？

「でもこれ……先輩には絶対に解けませんよ？　ワタシのことはともかく、エラリー会長
の誕生日や好きな色なんて——」

——そこから先の会話は、大体先輩に話した通り。

ただ、最後に会長はこんなことをワタシに言ってきた。

「コゴローちゃんは自分に正直だけど、私に言わせれば全然素直じゃないね。彼を横取り
されて寂しいなら、昼休みに来るべき場所はここじゃない……違うかな？」

本当、いけ好かない。

自分でも気づいていなかった気持ちをあつさり見破ってくる。

「……コゴローちゃんって呼び方、かわいくないのでやめてください」

「善処するよ」

いつの間にか何事も無かったかのようにその両目には光が戻っていて、そこにはいつも通りの柔和な笑みがあつた。

ワタシはエラリー会長が苦手だ。

そのことを知っていながら、他の学生と同じようにに分け隔てなく接して、相談すれば手も差し伸べて。

この後、ワタシは受け取った謎解きを巡って大敗を喫し、結果として様々な決意を新たにするのだけれど、それもきつとこの人の目論見通りなのだろう。

そこまで分かっているながら、その目的までが見えてこない。この人は一体ワタシたちに何をさせようとしているのか。

敵か、味方か、それすらも。

でも、もし将来障壁として立ち足かかってきたそのときは、必ずワタシがその鼻を明かしてやるんだと、ワタシは強く思った。